大鹿スケッチ

第50号
2014年
12月
〈　発信者　〉
前志満　くみ
〈　提供　〉
旅舎　右馬允

今年は雪が降るのが早く、十二月に入って二週続けて雪節を観測した。山の上も人が暮らす里にも白い塊がある。これから本格的な冬。一月～三月は毎週末、所用で上京する予定なので先の雪の降り具合が少し心配。しかし心配したところでどうにもならない世界のこと。なにはともあれ、自然とともに参ろうか。

結局、平行線に終わった。この要望書に対したJR　生活がよって集まると、

二〇一四年一一月十日J東海の回答に住民の注意　一つの自治体となり、そ

R東海が大鹿村で開いたリ　は注がれなかった。JR東の地域の特徴として目に

ニア中新幹線の事業説明会　海に向けられた村民の感　見えてくることを考える

には約三百人の住民が集ま　情、不安、不満はそのままと一番根っこにある、ひ

り、質疑応答は延長に延長　行政に対しての憤りでも　とひとりの生活感、考え、

を重ね二時間半に及んだ。　あると感じた。住民の声を持ち味」は大切だと思う。

工事への理解を求めるJ　集約してこなかった行政　S三十年代初頭、大鹿

R東海に対し、住民からは　の怠慢が明らかになった　村は5千人規模の村であ

「リニア計画は白紙に戻す　のだ。今後、住民と行政のっ　た。ちょうど団塊の世

べきだ」「山に手をつけな　信頼関係がないまま、いく代が勢いを持っていた時

ければ失われる命（山、水、ら説明会を開いてもJR　期だ。当時、青年部で活

動植物）はない」「風景は　東海との話し合いは平行　躍していたNさんに話を

一度失ったら取り戻せな　線に終わるだろう。　伺うと特段、会議は設け

い」など根本的な反論が相　大鹿村でどのように暮　ずに様々な取り組みが始

次いだ。大鹿村はこのリニらしたいか、何を大切に生まっていったという。今

ア計画に対し、工事前提で　活したいのか、子供達に残に続く夏祭りや花火の打

議論を進める「リニア対策　したい大鹿村とは――　ち上げがそれにあたる。

委員会」を立ち上げ約1年―。一番底辺にあるべきこそれらの企画がどのよう

間議論してきた。環境影響　とが未だ、なおざりになっに始まったかと言えば、

評価書に対してJR東海にている。　春、秋の集落のお祭りの

要望書も提出している。従**『議論の場』が足りない。**「なおらい」や消防団の

って、今回の説明会では村　そもそも、ひとは集落の集まり、スポーツ大会後

の要望に対してJR東海は中でどのように意思疎通　の懇親会で意気投合した

どこまで答えてくれるかが　を図り、生活をしてきたのたパターンだったとい

争点だったはずだ。しかし　だろうか。住民一人一人のう。自営業や勤め人など　職業柄によって貢献できる時間帯　や曜日も違うが、それはそれで役割　がないのだと思う。現代においてど　のような「話し合い場」の設定が必　要なのか興味がわいた。（つづく）

２０１４年１１月１０日ＪＲ東海による
住民説明会の時の様子

左写真　大鹿の一〇〇年先を育む

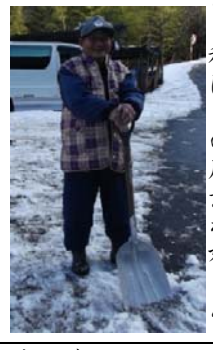
大鹿 HeatBeat

～大鹿の人々～　第48回

紙谷　正　さん　(88)

季季節ごとの風景と共に大鹿人の生活をご紹介します。日々の中に熱く響く「鼓動」をお届けします。

一〇日紙谷正さんを訪ねると畑の大根を室にしまっていた。畑に沢山の大根を収納できる穴を二つ掘る。大根の大きさに応じて仕分けしてしまう。片方は一月の凍み大根ように少し大きめ、もう片方は煮物用に適度な大きさ。一通りしまい終わるとモミガラをたっぷりとかぶせる。私はこの風景が好きだ。



三一日紙谷さんは道路わきの雪をスコップでほぐして移動させていた。お正月に訪れる親族のために、かたくなった雪の塊を根気強くガシガシとやっている。

十二月二二日～二五日まで冬山トレーニングに出かけた。もちろん講師つきで。古典ルートの塩川から入り、三伏まで至って冬山演習、気が向けば烏帽子、小河内岳まで足をのばそう。そんな予定で入山。一日目で三伏に着く予定でいたが、雪が多く、一番乗りラッセルで峠へは遠く及ばず、二日目でやっと三伏峠到着。三日目で演習と稜線歩きを敢行した。二日間のラッセルが祟ってか、左膝に痛みがあり、三日目の稜線でいよいよ踏み込めなくなってしまった。悔しいが烏帽子の手前で引き返した。下りは概ね大丈夫なのだが、登りの時の膝の屈曲四十五度以上に耐えられない。膝をまっすぐに延ばしていれば痛みもないので扱いを工夫して進む。ただ、見ている側からは痛々しく映るらしく、見ていられないと、肩をかされるが、自分の体の事は自分で調整する習慣があるので断わってゆっくり歩かせてもらう。日頃、体の不都合は余りないのでいい勉強になった。